

2024

The 63rd International Speech Contest in Japanese

聞いてください、私たちが見た日本、感じた世界。

第63回 外国人による 日本語弁論大会



— 応募要領 —

応募受付期間 2024年6月1日(土)～8月31日(土)

開催
日時

2024年10月19日(土) 午後1時 開始

開催
場所

神奈川県 小田原三の丸ホール

応募お待ち
しています!



小田原市 うめまる
観光PRキャラクター 梅丸

〈主 催〉

グローバルな人の移動がますます進む現在、私たちが住む地球の豊かな発展には、国籍や文化の違いを越え、建設的な意見交換を行いながら、より一層の相互理解を深めることが大切です。日本の社会や文化に日頃から深く接している世界各国および地域の人々に、日本語でスピーチをする機会を提供することは、発表する本人に対して、また、それを聞くすべての人に対しても、新たな視点を与えてくれる好機です。違いを知り、違いを楽しむことこそ、人類の平和共存・発展へ繋がるという想いから、1960年より毎年「外国人による日本語弁論大会」を開催、1998年（第39回大会）からは、各都市を巡り開催しています。第63回となる2024年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により3年ぶりの開催で神奈川県小田原市で開催いたします。日本社会において多文化共生社会の実現が喫緊の課題となっている今こそ、日本語を学び使う方々のことばに、改めて耳を傾けたいと思います。

おう ほうりょう
応募要領

1. 日時および開催場所

2024年10月19日(土)午後1時開始

小田原三の丸ホール

〒250-0012 神奈川県小田原市本町一丁目7番50号

<https://ooo-hall.jp/>

2. 演題および制限時間

- 演題は自由、ただし伝道、宣伝に類するものは不可で未発表作品に限る
- 制限時間は6分以内、時間超過は減点の対象となる
- 過度な演出、演技および小道具の使用は禁止

3. 出場資格

次の①～③の条件をすべて満たす方

- ①母語が日本語以外であること
- ②本大会(本選)当日の年齢が満15歳以上であること
- ③過去のこの大会で外務大臣賞または文部科学大臣賞を受賞していないこと

4. 審査基準

- ①演題の良否(演題が聴衆の興味と関心と呼ぶタイムリーなものであり、これを論ずることに意義が認められるか)
- ②事例の適切さ(取り上げられる事例は演題を説明する上で十分かつ適切なものであるかどうか)

- ③内容の構成(独自の見方、考え方が適切に表現され、演題が論理的かつ効果的に整然と展開されているか)
- ④語句の使い方(演題、内容にふさわしい語句を選んでいるか、その発音、抑揚、文法は適切か)
- ⑤話し方(表情、動作などが自然で、好感が持て、かつ説得力があるか)

以上の5項目を中心に審査を行います。

※ただし、予選審査の段階で日本語の能力、運用技術だけでなく、日本語の学習歴、学習環境、個人の資質および大会の開催趣旨である国際理解への社会的効果を参考として審査の対象とする場合もあります。

5. 出場者決定

審査基準の①～⑤に基づき、スピーチ原稿およびスピーチの録画映像に対して予選審査を国際教育振興会内で行い本選出場者10～12名を決定します。その結果は**2024年9月上旬**に直接、応募者に通知します。

6. 応募方法および応募締切

応募期間：2024年6月1日(土)～8月31日(土)

- ①所定の申込用紙に記入(用紙は国際教育振興会のホームページからプリントアウトしてください)
<https://www.iec-nichibei.or.jp/pdf/speechcontest63.resist.pdf>
※入手が難しい方は大会事務局までご連絡ください。

②スピーチを録画したメディアまたはデータ

①日本語で氏名および演題を言ってから、スピーチを始める。

④スピーチは6分以内に必ず終わる。

⑤1スピーチにつき1枚(個)の記録メディアまたはファイルに記録する。

⑥収録は、正面からスピーチをしている顔が映るようにする。

⑦PC・スマホのカメラやビデオカメラなどを利用して、録画し、データファイルをメール添付やファイル転送システム(ギガファイル便、データ便など)を利用して送付。または、DVD-R、SDカード、USBメモリなどの記録メディアに記録し申込書に同封して郵送する。データ記録の際にコピープロテクトはしない。

⑧録画環境が身近に無い方は、音声のみを録音したもので構わない。

※再生時の不具合などあった場合、再送などをお願いすることがあります。オリジナル映像/音声は必ず応募者各自で保管してください。

③スピーチの原稿(A4サイズの用紙にプリントアウトまたは手書きしたもの)または原稿をWORD/PDFなどで保存したデータ

④顔写真(3cm×4cmで顔が正面からはっきりと写っているもの)を申込書に貼るか写真データを添付
上記の①～④をまとめて応募書類送付先まで郵送またはメールに添付して提出をお願いします。(応募書類などは返却いたしません)。

応募書類送付先

☆郵送の場合

〒160-0004

東京都新宿区四谷1-6-2 3F

国際教育振興会

「外国人による日本語弁論大会」事務局宛

☆メールの場合

speechcontest@iec-nichibei.or.jp

件名に「63回応募(応募者名)」を必ず明記。

応募締切日 2024年8月31日(土)までに
届くように送付のこと。

注記: 一人で複数のスピーチの応募はできません。また応募したスピーチの内容を本選で変えることはできません。(不適切な用語または事実誤認など、若干の訂正は認めますが、その場合は国際教育振興会弁論大会事務局まで連絡をしてください)

7. 本大会表彰(予定)

◆外務大臣賞……………賞状・賞杯

◆文部科学大臣賞…………賞状・賞杯

◆小田原市長賞……………賞状・楯

◆会場審査員賞……………賞状・楯

(当日来場者の投票で最多得票を獲得したもの)

その他、副賞および参加賞(主催・協賛団体提供)

8. その他

①交通費に関して

本選への出場者は大会前日の夕方、開催地集合となります。日本国内の居住先/滞在先/入国地から小田原市内宿泊施設までの交通費は主催者が負担いたします。ただし原則として公共交通機関のみで、タクシー代は個人負担とします。

②宿泊に関して

本選への出場者には主催者が宿泊(10月18日(金)～10月20日(日)までの2泊)を手配します。費用は主催者の負担とします。

③著作権に関して

スピーチの著作権はすべて一般財団法人国際教育振興会および小田原市に帰属します。
ただし放送局が放送用に録音・録画した制作物の著作権および編集権は放送局に帰属します。

注記: なお、出場者全員のスピーチが放送されるとは限りません。またスピーチが編集される場合もありますので予めご了承ください。

④広報での使用に関して

本選の出場者の氏名、国籍/地域、所属(学校名、勤務先など)、写真などは大会のプログラム、宣伝用のチラシ、主催者・後援者のWEBサイトを通じて事前に公表いたします。また、本選出場者全員のスピーチ映像を主催者のWEBサイトに大会終了後、公開しますので、ご了承ください。

⑤個人情報の取り扱いについて

応募者ならびに出場者の方々の個人情報は「外国人による日本語弁論大会」の実施目的のために使用します。主催者、後援者または協賛者以外の第三者に許可なしに個人情報を渡すことはありません。

⑥大会実施の判断について

災害等により実施が困難と主催者側が判断した場合、開催延期または中止をすることがあります。

**大会に関する
問い合わせ先**

一般財団法人国際教育振興会 「外国人による日本語弁論大会」事務局

電話 03-3359-9620 ホームページアドレス: <https://www.iec-nichibei.or.jp>

E-mail: speechcontest@iec-nichibei.or.jp 月～金曜日 9:00～17:00

第63回 外国人による日本語弁論大会

The 63rd International Speech Contest in Japanese

〈主 催〉

一般財団法人国際教育振興会／独立行政法人国際交流基金／小田原市

〈後 援〉

外務省／文部科学省／神奈川県／神奈川県教育委員会／小田原市教育委員会／公益財団法人かながわ国際交流財団／
一般社団法人小田原市観光協会／小田原箱根商工会議所

NHK／NHKエデュケーショナル／日本語教育学会

〈助 成〉



一般財団法人
自治体国際化協会

この事業は、一般財団法人自治体国際化協会の助成事業により実施されています。

〈協 賛〉

キッコーマン株式会社／専門学校新聞社／にほんごの凡人社／株式会社スリーエーネットワーク

日本語弁論大会63年の歩み

一般財団法人国際教育振興会が毎年開催している事業の一つに外国人による日本語弁論大会があります。この大会は1960年に第1回を開催、以来、1995年の第36回大会まで国際教育振興会が単独で主催、会場は当時東京・有楽町にありました朝日新聞社講堂で始まり、その後は虎ノ門の国立教育会館（通称、虎ノ門ホール）で開催しておりました。1996年（第37回大会）から国際交流基金と共催にて開催、1998年（第39回大会）から開催都市も含めた3者共催となり、今日に至っております。以下、地方開催からの大会結果をご紹介します。

開催年 回／開催地	会 場	外務大臣賞		文部科学大臣賞	
		演 題	受賞者／出身国	演 題	受賞者／出身国
1998年 第39回 岐阜市	長良川国際センター	単身赴任で学んだこと	マーク アンダーソン アメリカ	食文化－国際交流への近道	ヤティーン マスタカル インド
1999年 第40回 福岡市	アクロス福岡・福岡シンフォニーホール	違うってことは素敵ジャン	ラズモフスカヤ オクサナ ロシア	忘れ得ぬ日	リ テイ 中国
2000年 第41回 長崎市	長崎ブリックホール	みそのみそくさいは上みそにあらず	クニユガ エヴァンス ギタヒ ケニア	垢擦りしないでください	バク ソンヒ 韓国
2001年 第42回 上越市	上越文化会館	心は日本人	ジェイソン ハンコック アメリカ	日本で流した二回の涙	チョ スンヒョン 韓国
2002年 第43回 大阪市	大阪国際交流センター大ホール	国際交流と書いてエンターテインメントと読む	レイモンド タン リーフン マレーシア	日本の高齢社会から学ぶもの	チン シャオシェン 中国
2003年 第44回 札幌市	札幌コンベンションセンター	僕の大好物がまぐろになった理由	ザイナル アクラミン マレーシア	なくそうバリア、ふやそう心のバリアフリー	キム ミョンフン 韓国
2004年 第45回 高知市	高知市文化プラザかるぼーと	さとうきび畑の唄	キム シンエ 韓国	心の故郷	ビヤール バルマ インド
2005年 第46回 米子市	米子コンベンションセンター	縁側から始まる日韓交流	ハ アラン 韓国	一服のお茶から	ジョアン オブライアン アイルランド
2006年 第47回 下関市	下関市市民会館	日本における豊かさとは？	ラリット マヤ マハット ネパール	心のスイッチを押してください	ミン テイル 韓国
2007年 第48回 泉佐野市	泉佐野市立文化会館泉の森ホール	関西弁は第二日本語	キム ヨハン 韓国	僕の生まれたところは	イ ゼフン 韓国
2008年 第49回 川越市	川越市市民会館	若者・馬鹿者・よそ者	サミラ グナワラデナ スリランカ	あなたは「大変」ですか	フェレシテ ナジミ イラン
2009年 第50回 函館市	函館市市民会館	北の国で学んだ三つのこと	ドミニク バゲンダ カスツジャ ウガンダ	調べてガッテン日本語の「はい」	シャボヴァーロヴァ スヴェトラナ ロシア
2010年 第51回 新潟市	新潟市民芸術文化会館りゅーとぴあ	ソコ、読みな！	ヨウ ロ 中国	私の韓国語奮闘記	キム ギョンヒ 韓国
2011年 第52回 町田市	桜美林大学ホール (つくば市開催予定が震災のため変更)	私は「脅威の国」から来た娘？	リ メイギョク 中国	私の異文化体験・愛の伝え方	タウン ラ ミャンマー
2012年 第53回 別府市	別府市ビーコンプラザシンフォニーホール	日本の田舎に学んだもの	山崎ランサムどりあ アメリカ	日本人の若者の「やばい」言葉遣い	チャンビンソンミッド パカム ラオス
2013年 第54回 北九州市	北九州芸術劇場大ホール	気になる「気」	ワハバド サルティンビンク アジナ マレーシア	ホームレスに学んだ日本人の精神	レイラ ミュキ アンラク ブラジル
2014年 第55回 松江市	松江市総合文化センター「プラバホール」	育爺時代の幕開け	カ ギョウオン 中国	働かせてもらう意識	ジョン サンジン 韓国
2015年 第56回 東近江市	東近江市立八日市文化芸術会館	心の種、私の言の葉	ジャレル ジョイス サミエト カリガ フィリピン	どうすれば忘れないのか	アンドレ ベレズ アメリカ
2016年 第57回 高山市	高山市民文化会館	若い心に、でっかい夢を	フローリス デ・グラーフ オランダ	日本人になるのは、可能か	エリーザ フランチーニ イタリア
2017年 第58回 つくば市	つくば市立パホール	考えさせてください	ホウ エイ 中国	おもてなしって？	チャウ エン イ アイリニ マレーシア
2018年 第59回 彦根市	彦根の島ホール	船は風に流される	ハラ・ハティープ シリア	完璧な私って無理？	カテリーナ ノヴィツカ ウクライナ
2019年 第60回 八戸市	八戸市公会堂	私が私に還る島	キム ドンス 韓国	平和のおかげのビジネス	ムハマド ウワイズ アルバハリ シリア
2020年 第61回 福山市	中止(新型コロナウイルス感染拡大予防のため)				
2021年 第62回 佐賀市	佐賀市文化会館	十色の世界	タイラー パートン アメリカ	感謝していること	シャン ゼーラ ゼディ アメリカ

例年、約100名前後の応募者の中から、予選審査で決勝大会出場者を選出しておりますが、年々応募者の日本語能力が向上し日本語が母語ではないか、と思わせるほどの話し方をする出場者が増えております。外国人の日本語習得の高さをますます実感いたします。